

歌集『あかね雲』より（七）

登美子

紅葉狩りしたしたと集めし

小予算義援金にと友ときめたり

青藁で割れの縋いたる注連縄を掛けし

孫の二輪車ゆるゝと行く

重の隅に赤きハム等飾り入れ

われも細き口紅ひきてみる

木枯らしを背に負い庭の草を取る

はこべを少し残しておきぬ

初めての里雪の日は

二輪車の孫の帰りをただぐ待ちぬ

大根や白菜の作の良き年は

漬物うましと子等の言いくれ

夫婦とて禁句のありや

一夜過ぎ言わずに良かった一皿増やす

ゲートボールたまたま当たりし

彼の玉出せば笑顔で眺められおり

ただただに台地が好きで農たると

老いたる男の一言が好き

松を活けお題一首を詠み書きて

家族穏やか寅年寿ぐ

道後來て温泉プールでゆるゆると

歩く我らを若きが追い越す

福寿草の芽出し見つけて嬉しさに

肥やしやり土掛け大切にせぬ

人生は細かきことの連なりと

水引草の雨に思えり

水引草細かきながらも数寄れば

供華にもなりてお墓に持ちおう

豊作に柿の始末にかなわずに

雪に映るを鳥の啄ばむ

新聞に載りたる歌は皆良くて

わが歌つたなくまた齡重ね

兵役が甲種合格のわが夫の

ズボンの丈を五尺六寸切る

気付きては襟を正して髪とかす

午後の集いに心したしたと

杖つける媪おつなに母の面影を

見たる心地してそつと手を貸す

腹いっぱい風を含める鯉幟

雨降る前か南風に揺れる

使い捨てカイロの温もり

やせすぎの私の腰痛やんわりとす

着る物も炬燵までもが地味なこの部屋に

赤や黄色のタオル出して見る

在りし日に優しき歌を作られし

友に別れの香をたきおり

ずぶ濡れの汗の作業着脱ぎきれず

夫の背中にわが手伸ばしぬ

固き名の似合わぬ花と思いきに

今枯づる見て鉄線と知る

獅子舞の笛聞こえ来て

米一升盛りて門戸開きて待ちおり

畔に休む老二人して掛け終えし

棚田の稲架に西日燃えおり